様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：23302
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22592600
研究課題名（和文）看護と介護の連携に向けた教育デザインに関する研究
研究課題名（英文） Studies on Educational Design for cooperation with nursing and care stuffs
研究代表者
川島　和代（KAWASHIMA KAZUYO）
石川県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40157855

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、法的整備がととのった介護職員等による喀痰吸引と経管栄養等の医療行為の実施に向けて、従来の介護職員に行なってきた医療行為に関する研修の評価を踏まえ、課題を明らかにすることである。さらに、喀痰吸引等の研修事業の実施を通して、「看護と介護の連携」の課題を明らかにして、研修事業に反映させることである。この 2 つの研究課題に取り組んだ結果、介護職員による喀痰吸引等の本県の研修事業に以下の内容を取り入れることにした。①看護職員と介護職員の研修を同時開催、②喀痰吸引と経管栄養の実施の根拠がわかる教材の開発、③介護職員の練習時間・環境の確保、④指導者研修の充実、⑤介護職員への感染や疾病に関する基礎的な知識の習得支援

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify problem related to the implementation of the expectoration suction and tube feeding that are carried out by care stuffs in Long-term care facilities. It is that, in addition, to clarify the issue of cooperation with the nursing and care stuffs. Result, we performed new suggestion for the training of expectoration suction and tube feeding in Ishikawa Prefecture. Nurses and care staffs perform the training of expectoration suction and the tube feeding together. Development of the teaching materials about expectoration suction and the tube feeding. Provide training time and environment of expectoration suction and the tube feeding for care staffs. Enhance the education of teaching nurses. Educate basic knowledge about infection and the illness to care staffs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学、基礎看護学
キーワード：看護と介護の連携、たんの吸引、経管栄養、教育デザイン

１．研究開始当初の背景

１）介護職員が医療行為を行うようになってきた背景

近年、医療機関における在院日数の短縮により病状が安定しない状態や終末期の状態でも施設・在宅へ移らざるを得ない高齢者が増加してきている。そのような高齢者の介護を行なっている介護保険施設等では、必要な医療的ケアを看護職員のみならず、介護職員が医師や看護職員の指示の下、担ってきたという経緯がある。平成 17 年度に厚生労働省医政局長から**「医師法第 17 条、歯科医師法第 17 条及び保健師助産師看護師法第 31 条の解釈について（通知）」**において、医療機関以外の高齢者介護・障害者介護の現場等において、原則として医行為ではないと考えられる行為(以下医療外行為と略す)について明記された通達が出され、明確な線引きがなかった行為が一定明確になったと捉えられる。

２）介護職員が喀痰吸引等の医療行為の実施が認められていった経緯

この通達と前後して、喀痰吸引や経管栄養に関して、ALS 患者団体や盲･聾･養護学校、在宅における ALS 以外の療養患者･障害者、特別養護老人ホーム等で介護職員が行なえるよう要望が出され、これらの対象に介護職員が喀痰吸引や経管栄養を実施することは「実質的違法性阻却」としてみなされる通達が出された。しかし、喀痰吸引等の必要な対象は特別養護老人ホーム等にとどまらず、介護職員が医療行為を実施するための法的整備の必要性が議論され、平成 23 年 6 月 22 日に、**「社会福祉士及び介護福祉士法の一部改正」**の公布に伴い、介護福祉士の喀痰吸引等の実施が医師の指示の下に行われるものとなった。また、**「介護サービスの基盤強化のための介護保険法等の一部を改正する法律」**の制定の中で一定の研修を受けた介護職員（介護福祉士を除く）も、たんの吸引等の実施が認められることとなった。厚生労働省から各都道府県に「喀痰吸引等研修実施要綱について」の通達が出され、研修委員会を設置し、研修指導者の育成や研修内容（基本研修 50 時間、筆記試験、演習、技能審査、実地研修）を定めて取り組んでいるところである。

研究者らは、この法律の変更に伴って研究計画を修正し、研修事業の企画・立案に携わり、研修課題を明確にしつつ、本事業の主軸となる「看護と介護の連携」の実態を明らかにし、教育プログラムの検討に向けて研究に着手した。

２．研究の目的

研究課題１：看護と介護の連携に向けた教育デザインに関する研究～介護職が実施できる医療行為等の研修に関する評価～

本研究の目的は、本学で開催してきた介護職のできる医療行為等の技術セミナーが、その後の受講者のケアに対する影響を明らかにし、今後の研修内容の基礎資料とする。

研究課題２：介護と看護の連携に向けた教育デザインに関する研究～看護職の介護職への「たんの吸引等」の指導場面の実際より～　「喀痰吸引等の研修事業」において、看護職員の介護職員への指導場面における実際を観察して、看護職員の指導・助言時の判断の特徴と介護職員の知識・技術習得との関連性を明らかにし、今後の研修の課題を把握することである。

３．研究の方法

１）研究課題１：研究方法は、質問紙調査による実態調査である。調査対象者は、平成20～22年度に石川県立看護大学において実施した「介護職員が実施できる医療行為に関する技術セミナー」（講義と実習を組み合わせ2日間、計16時間にわたって実施）を受講した介護福祉士約300名である。質問紙の内容は、①基本属性、②受講した研修内容の習得状況、③受講後のケアへの影響、④研修体制への要望など4部で構成。分析は、記述統計にて全体の傾向を明らかにし、自由記載については類似した内容を整理した。所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施。（承認番号679）

２）研究課題２：研究方法は、本学の看護学実習室でシミュレーターを用いて介護職員への「喀痰吸引等」の技術指導している看護職員の指導場面を参加観察、インタビューによる実態調査。インタビューは自由に話せてプライバシーが守れる個室にて実施。研究対象者は、「喀痰吸引等の研修事業」において講師を務め、直接指導にかかわっている看護師と研修受講中の介護職員を候補者（ペア）とし、研究参加の同意が得られた者とした。データ収集方法は、①研究者の参加観察（観察者の立場）により、フイールドノートに指導看護師の指導場面を記録。②記録したデータを読み、指導看護師の言動や行動に注目し、その時の判断について記録をもとにインタビュー、③助言を受けた介護職員の言動や行動に注目し、その時の介護職員の判断についてインタビュー、なお、インタビュー内容は、許可を得てICレコーダーに記録し、逐語録として起こす。分析は、参加観察記録とインタビューの逐語録を複数の研究者間で精読し、看護職員と介護職員の行為と判断内容の共通と相違点を明らかにする。その中で介護職員の知識の想起や技術修得に有用であった内容を抽出する。医行為を連携して実施する上での課題について検討を行なった。所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。（承認番号550）

４．研究成果

１）研究課題１の結果と考察

(1)対象の背景：Ａ県介護福祉士会所属の介護福祉士で、研究者らが開催した研修会『介護職ができる医療行為に関する技術セミナー』受講者305人に調査用紙を郵送したところ、回収は162人であった。**(回収率53.1%)**

対象の背景は、男性26人（16.1%）、女性134人（82.7%）と圧倒的に女性が多数を占めた。年代は、30歳代、40歳代がほぼ同数次いで、50歳代、20歳代の順であった。勤務先は介護老人福祉施設がもっとも多く94人（58.0%）と過半数以上であった。介護福祉士の資格取得の背景は実務経験を経て国家資格取得者が117人(72.2%))を占めていた。

(2)医療行為実施のための基礎となる知識と技術の習得状況：セミナーの難易度は「まあまあわかった」～「よくわかった」と評価する者が、講義・実習とも80～90%を占めていた。講義内容の習得度を自己評価で答えてもらった結果、「呼吸機能のしくみと働き」、「循環機能のしくみと働き」、「体温調節のしくみと働き」等の解剖生理学の知識は60%が「まあまあイメージできる」30%が「イメージできる」と回答している。「嚥下機能のしくみと働き」等の解剖生理学の知識は、60%以上が「イメージできるようになった」と高い割合であった。

具体的なケア方法では、40～50%の受講者が「まあまあわかるようになった」と回答し、30～60%が「よくわかるようになった」と答えている。本研修は、介護福祉士が日々、行

なっているケアに根拠を持って実施するための一助となることが示唆された。自由記載欄から、本研修でシミュレーターを用いた実際的な研修を取り入れたことが、「わかりやすい」との声につながったことが明らかとなった。逆に、習得状況において「あまりわからない」と回答した割合が多かった研修内容は「薬物の種類・作用・副作用」であった。介護福祉士は、現場で服薬介助をしているが、薬物の知識がないまま、服薬の介助に当たっている実態が浮きぼりとなった。また、研修後の受講者の技術習得のレベルについての質問には、「全く自信がない」～「あまり自信がない」が、実施していない者を除くと 30～40%を占めており、2 日間程度の短い研修では習得には限界があると思われ、職場内研修の充実の必要性が示唆された。

(3)「介護と看護の連携」に関して：本研修において「介護と看護の連携の必要性の理解」**(図１)**の手助けになったかの設問に 60%の受講者が効果的であったと回答している。

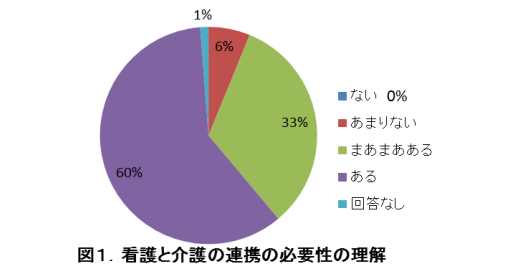

図1. 看護と介護の連携の必要性の理解

看護と介護の源は同じであるが、歴史の中で分業が進んだという職業の発展過程を伝えることは、他職種を理解する有効性が示唆された。研修後「介護と看護の連携」**(図２)**に変化があったかどうかについては、「変化はない」が 9 割以上を占めており、介護福祉士への研修だけでは限界があると思われた。

さらに、自由記載欄には看護職員が「上から目線」などと感情的な対立も生じていることが記載されており、介護職員だけではなく、看護職員に対するパートナーシップ教育が重要であると思われた。

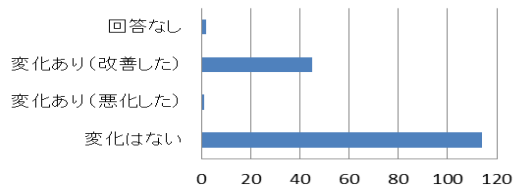

図2.看護職との連携の変化

本調査実施の結果を受けて、平成 24 年度からは、「看護と介護の連携」に関しては、両職種の同時教育を企画し、実施を試み始めている。

２）研究課題２の結果と考察：

(1)「喀痰吸引等研修」における介護職員の学習効果と今後の課題

まず、「喀痰吸引等研修」における介護職員の学習効果と課題を明らかにした。対象となった介護職員は、30代～40代の女性３名であり、介護保険施設や身体障害者施設に勤務している介護職員であった。介護職員としての従事年数は、3人とも10年以上であった。分析の結果抽出されたカテゴリーは、**表１**に示したとおりである。

【教科書には、記載されていない事を教わった】、【吸引・経管栄養の注入が利用者にどのような影響をおよぼすかを考えることができた】、【実施する行為の根拠となる知識を得ることの重要性を感じた】と、研修を肯定的に捉えている意見をカテゴリーとして抽出できた。一方、「看護師同士で意見が違うのを聞くと正しい方法がわからなくなり心配になる」など、指導する看護職員によって**【学習内容の混乱】**が生じ、「順番に覚えているので1つ抜けると次が出てこなくなる」と、丸暗記に頼る学習方法が取られていることが懸念された。また、「講義・演習から1か月が経過しているため忘れていることが多い」と**【学習内**

容を忘れてしまう】、受講している介護職員の勤務する職場で練習する環境が整っていないことも推察できた。

表１．介護職が研修で学んだこと・体験したこと

カテゴリー名
鼻腔から咽頭の構造
喀痰吸引の手順と必要物品
鑷子の使い方
吸引時間とその根拠
吸引圧とその確認の必要性
粘膜出血をさせないための吸痰チューブの挿入方法・吸引の方法
気管カニューレの注意点
清潔・不潔の区別と感染防止の必要性
実施前の確認項目
経管栄養の注入が利用者におよぼす影響
ヒヤリハットの必要性
教科書に書かれていないことを教えてもらえた
医療行為を実施するという緊張感を感じた
吸引・経管栄養の注入が利用者にどのような影響をおよぼすかを考えることができた
実施する行為の根拠となる知識を得ることの重要性を感じた
学習内容の混乱
学習内容を忘れてしまう
学習方法の工夫を考えた・実施した
看護師の指導に感謝の気持ちをもった

(2)「喀痰吸引等研修」における指導看護師の指導の特徴と今後の課題

次に、看護職員の介護職員への「喀痰吸引等研修事業」における指導場面の実際から、看護職員の指導場面における判断の特徴と課題を明らかにした。研究対象者は、「喀痰吸引等の研修事業」において講師を務め直接指導にかかわっている看護職員のうち、研究協力の同意が得られた介護職員を指導し、かつ研究協力の同意が得られた 40~60 代の看護職員 5 名である。勤務先は医療機関、介護老人保健施設、介護老人福祉施設、訪問看護ステーションであった。勤務経験は、18～40 年と長い看護師としての勤務歴を有していた。取り出した看護職員の指導時の判断の特徴は、**表２**に示した通りである。

表2. 指導看護師の指導場面における判断の特徴

判断の特徴
根拠とつなげて実施しているか確認する
観察ポイントを理解しているか確認する
感染防止の視点の有無を観察する
具体的な技術のコツを教える
手順を丸暗記することへの危惧を感じる
介護職員の技術の習得過程に関心を向ける
利用者の立場に立って実施することが重要
今までの学習スタイルでは技術習得には限界があ
介護職員の緊張や焦りに関心を向ける
介護職員の疲労度（集中力低下）に関心を向ける
介護職員の学習姿勢を肯定的に捉える
介護職員の取り組み姿勢に疑問を感じる
介護職員の演習時の負担を軽減したい
学んだ事を身につけるための環境が整っていない
自分の指導スタイルをふり返り、これで良かった
自分の指導スタイルが確立されてきている
過去の自分の失敗経験が指導のポイント
介護職員の技術の到達度に責任を感じる
指導者間のずれを感じる
職場と研修で教えていることのずれを感じる
指導者の疲労度（集中力低下）に関心を向ける

今回の実態調査の結果、指導看護師の判断の特徴を見ると、**【介護職員の緊張感や焦る気持ちに関心を向け】**、連続 5 回の演習評価に**【介護職員の疲労度（集中力の低下）にも関心を向け】**て、演習時の負担を軽減したいと捉えていた。また、**【手順を丸暗記することへの危惧は感じ】**ながらも、観察項目を覚えること、感染防止行動が取れていること、**【具体的な技術のコツの習得】**を重視していた。これは、指導看護師自身がこのように技術習得をしてきた体験から、同様の指導スタイルをとっていることが推察できた。**【介護職員の技術習得への姿勢を肯定的に評価する】**一方で、介護職員の認識を確認していない**【自己の指導スタイルに疑問】**を述べていた。さらに、学んだ技術を身につけるために、介護職員に対して練習環境・時間・物品等が確保されていないことを懸念していた。指導看護師間でも知識・評価の視点にずれがあり、介護職員に不利益を及ぼすと

とらえており、指導看護師の研修の充実を挙げていた。

喀痰吸引等の技術を習得する上での介護職員の課題は、①喀痰吸引や経管栄養のための技術練習の環境の確保、②根拠とのつながりが弱いまま実施手順の暗記に頼った学習方法、③テキストに書かれていないことを、指導看護師の助言を得て技術習得がすすんでおり、指導看護師の質が学習効果に影響、④指導看護師とは上下関係の中で研修が進んでいる状況がうかがわれ、連携上の阻害要因になる可能性、一方で、看護職員の課題は、①介護職員の演習評価へのストレス軽減のための対策不足、②手順の暗記に頼った演習評価、③介護職員のレィディネスの把握とそれに応じた支援、④介護職員の技術練習のための環境の確保。⑤指導者間の知識や評価視点のずれ

３）まとめ

研究課題１及び、研究課題２の結果より、「喀痰吸引等の研修事業」に、次のような新たな提案を行なった。①看護職員の指導者研修と介護職員の研修企画を同時開催し、同様の内容で研修を企画 ②喀痰吸引と経管栄養のテキストの作成と視聴覚教材の開発 ③練習時間・環境の確保のための研修時間の調整 ④指導者間の研修内容のずれの是正 ⑤介護職員への感染や疾病に関する基礎的な知識の習得支援

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

橋本智江、高山直子；高齢者介護の人材育成－ドイツと日本の比較研究－，日本比較文化学会，No.104，311-321，2012.

〔学会発表〕（計２件）

① 橋本智江、川島和代、林一美、中田弘子、木森佳子；看護と介護の連携に向けた教育デザインその１―「喀痰吸引等研修」における介護職員の学習効果と今後の課題―，日本老年看護学会第 18 回学術集会（大阪）抄録集，236，2013.

② 川島和代、橋本智江、林一美、中田弘子、木森佳子；看護と介護の連携に向けた教育デザインその１―「喀痰吸引等研修」における介護職員の学習効果と今後の課題―，日本老年看護学会第 18 回学術集会（大阪）抄録集，237，2013.

〔図書〕（計１件）

介護職員関係陽性研修テキスト作成委員会編:別冊介護職員の喀痰吸引等の医療行為，長寿開発センター出版，2013 年 6 月刊行予定
川島和代：分担執筆約 80 ページ

６．研究組織

(1)研究代表者

川島　和代（KAWASHIMA　KAZUYO）
研究者番号：40158755
石川県立看護大学・看護学部・教授

(2)研究分担者

橋本　智江（HASHIMOTO　TOMOE）
研究者番号：30515317
金沢医科大学・看護学部・助教

林　一美（HAYASHI　KAZUMI）
研究者番号：30279905
石川県立看護大学・看護学部・教授

中田　弘子（NAKADA　HIROKO）
研究者番号：70551167
石川県立看護大学・看護学部・講師

木森　佳子（KIMORI　KEIKO）
研究者番号：30571476
石川県立看護大学・看護学部・助教

藤田　三恵（FUJITA　MITSUE）
研究者番号：50554854
石川県立看護大学・看護学部・講師（平成 24 年 3 月まで）

(3)連携研究者

なし